

# 晩年のコルシュに関する資料的覚書

——「チューリヒ・テーゼ」とその諸解釈——

重 田 晃 一

## 1

テキサス大学の新進の哲学者、D・ケルナーは、昨年、『カール・コルシュ：革命的理論』というアンソロジーを刊行したが、その冒頭に解説として載せた力篇「コルシュの革命的マルクス主義」を、つぎの言葉ではじめている。「カール・コルシュは今世紀のもっとも興味深い、無視された、しかも現在直面している問題に関係の深い政治理論家であることが、日ましに認められつつある。」<sup>1)</sup> 事実、マルクス主義思想史に関心をいだく研究者の一部にみられるコルシュ熱は、近年相当のものであって、ケルナーのこの書物にあげられているコルシュ研究に関する文献を数えてみただけでも、著作、論文集各1点のほか、独立の論文に至っては、合計14篇の多きにおよんでいる<sup>2)</sup>。だがこれらの研究

- 
- 1) D. Kellner, *Korsch's Revolutionary Marxism*, Karl Korsch, *Revolutionary Theory*, Austin & London 1977, p. 3.
  - 2) C. Pozzoli (herausg.), *Über Karl Korsch, Jahrbuch Arbeiterbewegung*, Bd. I, Frankfurt 1973. M. Buckmiller, *Karl Korsch und das Problem der materialistischen Dialektik*, Hanover 1976. その他『テロス』1975～76年冬季号のコルシュ特集号を中心に、この雑誌と『ニュー・ジャーマン・クリティーク』などに掲載されたコルシュに関する14篇の論文が本論との関連で参照を求められている。なお、ブックミラーは、ポッツオリ編の『カール・コルシュ論』に *Marxismus als Realität, Zur Rekonstruktion der theoretischen und politischen Entwicklung Karl Korsch* を寄稿している以外に、*Karl Korsch ; Leben und Werk* と題する2巻

文献の大部分は1970年代にはいってから発表されたものであって、コルシュ自身の晩年の生活は孤独かつみじめで、一部の知人や識者を除けば、その本来の業績にふさわしい評価をうけぬまま不遇のうちに世を去った。

マルクス主義思想史のなかで比較的近年までコルシュがうけてきた以上の不当な処遇のなかで、つとにコルシュに注目し、いちはやく彼の再発掘を提唱するとともに、かたわら、1933年7月、ナチスによってイエナ大学を追われてイギリスに亡命して以後、1961年アメリカで死去するまでの彼の足どり、とりわけアメリカでの活動と影響に強い関心を示されたのが、わが国では水田洋氏であった<sup>3)</sup>。水田氏は1966年アムステルダム の社会史国際研究所を訪ねたさいに、コルシュの『カール・マルクス』のドイツ語版を編集した同研究所のランカウからきいた話の聞き伝えとして、渡米後のコルシュの惨状についてつぎのように語っておられる。「アメリカにわたってからのコルシュは、ほとんど職業につかないで、というより、つくことができないで」<sup>4)</sup>、教職についたヘッダ夫人に生活を支えられながら、「思索と執筆の生活をつづけた」<sup>5)</sup>と。ランカ

---

本のコルシュ研究書の公刊を計画し、その第1巻は1977年に刊行されたことになっているが、わたくしはまだみていない。

- 3) 水田洋『現代とマルクス主義』、新評論、1969年、126ページ（ただし当該文章は元来1964年に書かれたものである）。
- 4) 水田洋『社会思想史の旅』、新評論、1975年、30ページ。なおこの点については、ヨリ具体的には Buckmiller, Zeittafel zu Karl Korsch—Leben und Werk, Pozzoli (herausg.), *op. cit.*, S. 105~106, および Halliday, Karl Korsch: An Introduction, Karl Korsch, *Marxism and Philosophy*, London 1970, p. 21を参照。
- 5) 水田洋, 前掲書, 30ページ。かつてフランクフルトで創立されたさいにはコルシュ自身も参画し、その後ナチスに追われてアメリカに移設された旧フランクフルトの社会研究所と彼との間の関係は複雑で、たとえば1938年12月20日付のP・マティック宛の手紙はつぎのような書き出しではじまっている。「目下のところどの程度社会研究所に働きかけ影響力を行使できる可能性があるかをさぐってみるために、みじめなおもいで当地にでてきてから3日目になります。これまでのところではっきりしたことはつぎのことです。私の寄せた2篇の論稿は、真の意味を完全に失ってしまうような削除と歪曲をへたうえで、ともかく *Zeitschrift für Sozialforschung* に掲載されるでしょう。どのように歪曲された形においてであれ、これらの論稿がこの雑誌に採択

ウは、さらに水田氏に、「1961年に死ぬまでの数年間は、かれはもう正常な人間ということではできませんでした」、といったといわれるが<sup>6)</sup>、このランカウの言葉は、晩年（1956年）、コルシュは「脳動脈硬化症（sclerosis）」におかれ、「晩年の数年間を マクリーンの精神病院で送った」というケルナーの記している事実を、ごくおおざっぱな表現で伝えたものであろう。彼は「1961年10月21日、マサチューセッツ州のベルモントで」75年にわたる波乱にみちた生涯の幕を閉じた<sup>7)</sup>。

ところで、石堂清倫氏は、コルシュの『マルクス主義と哲学』（初版1923年）の邦訳の訳者「あとがき」で、この書物が「史的唯物論の方法をマルクス主義自体の発展に適用した」点で1920年代前半の「マルクス主義哲学の発展史」のなかで果たした役割を一面で相当高く評価されながらも、20年代のコルシュと

---

されるなら、それでもパンネクークとスペインに一定の利益をもたらすだろうと思わなかったら、わたくしはとくにこれらの論稿をとりもどしていたでしょう。……」（Karl Korsch, *op. cit.*, p. 283）。この手紙ではさらにホルクハイマー、アドルノ、マルクーゼ等々の研究所の所員や研究所そのものにたいする棘をふくんだ辛辣な短評が述べられ、あるいはライツラーなどの「裕福な人々」を雇っているニューヨークの New School for Social Research にたいする憤懣があからさまに表明されており、当時のコルシュの鬱屈した想いの一端がおのずとにじみでていて、当時の彼のみじめな境遇と心境を察するのに好個の資料をなしている。

彼と社会研究所の他の所員との間の関係は、研究所の創立当初からかなりぎくしゃくした関係にあったようであって、この点については、M. Jay, *The Dialectical Imagination*, London 1973, pp. 13~14を参照。

6) 水田洋, 前掲書, 30, 80ページ。

7) D. Kellner, Korsch's Revolutionary Marxism, Karl Korsch, *op. cit.*, p. 105. なお、ブックミラーはコルシュ年譜で、「1956 ヨーロッパ旅行；重病（脳動脈硬化症 Zersetzung der Gehirnzellen）はじまる」, 「1957 入院」, 「1961 10月21日, マサチューセッツ, ベルモントで死去」と記している（Buckmiller, Zeittafel zu K. Korsch, Pozzoli (herausg.), *op. cit.*, S. 106）。なお脳動脈硬化症はしばしば動脈硬化性精神障害を誘発し、心気症、虚無感、被害妄想をとまったりするだけでなく、重篤の場合には幻覚、夜間譫妄状態などを生じたりするといわれる。コルシュが精神病院で晩年の最後の数年間を送ることになったのは、おそらくそうした精神障害を生じたためと思われる。

40年代以後のコルシュとを分断し、両者を対立的に評価して、つぎのようにいわれる。「20年代のコルシュは、反ソ・反ボリシェヴィズムといいながら、マルクス主義の立場をとろうとしていたが、40年代以後になるとありふれた反共主義者になってしまったのである。はなばなしく革命家として活躍し、晩年に反対陣営のイデオログ（しかもほとんど顧みられることのない）にかわった点ではウィットフォークと似たところがある。」<sup>8)</sup>

では、いったいなにを論拠に、石堂氏は40年代以後のコルシュについて以上の酷評をくだされたのであろうか。一名「チューリヒ・テーゼ」の名で呼ばれる「今日のマルクス主義に関する10のテーゼ」（1950年執筆）がこれであって、このテーゼをもとに石堂氏はつぎのようにいわれる。このテーゼでは、「これが一時期のコルシュかと疑われるようなことを述べている。彼は、マルクス主義の教義を社会革命論とみとめるのは反動的空想であると宣言している。それは空想的社会主義やアナキズムやサンジカリズムその他とならんで、もろもろの社会思想の流派の一つとしてささやかな歴史的意味をもつにとどまっている。」<sup>9)</sup>

だが以上の石堂氏の立論は、コルシュの10のテーゼのうち、第5テーゼを中核に、それに第2テーゼを適度にまぜあわせることによって組み立てられたものであって<sup>10)</sup>、テーゼそのものの読みとり方としても検討の余地を多分に残しているといってよいが、その点をさておけば、この「チューリヒ・テーゼ」に依拠しつつ、晩年のコルシュにおけるマルクス主義の否認を説く研究は外国でもみられなくはない。たとえば、ケルナーによれば、L・チェパは論文「コルシュのマルクス主義」で「チューリヒ・テーゼ」をひきあいにしたしながら、「コルシュがマルクス主義的展望を全面的にしりぞけたことはほとんど疑いな

8) コルシュ／石堂清倫訳『マルクス主義と哲学』、三一書房、1975年、「あとがき」205～206ページ。

9) 同上、205ページ。

10) 本稿第3節収録の「チューリヒ・テーゼ」の訳文と照合されたい。

い」,との結論を下しているといわれる<sup>11)</sup>。だが遺憾ながら、わたくし自身はチェパの論文を手もとに所持していないので、以下ではそれにかえて、M・ブックミラー、J・カムラー編「革命と反革命——ハインツ・ランゲルハンスとの討論」<sup>12)</sup>の一節をとりあげ、かつてコルシュの門弟であり、友人であったランゲルハンス<sup>13)</sup>の結論的にはチェパとよく似た見解を紹介することにしよう。

この討論の記録は、全部で4つの見出しからなっているが<sup>14)</sup>、その最後の「マルクス主義の破壊？」では、コルシュは終生マルクス主義の立場を貫いたとする若き世代のコルシュイスト、ブックミラーと、彼のそうした解釈に懐疑的なかつてのコルシュイスト、老ランゲルハンスとの間で——ときにはカムラーも介入しながら——「チューリヒ・テーゼ」を中心に両々あいゆずらぬ白熱的論戦がかわされている。一説に「コルシュは自己の晩年にマルクス主義を棄てた」といわれるが、それは一見そのようにみえるだけであって、その真の内容は「マルクスのマルクス主義的批判」にある、というのがブックミラーの基本的立脚点である<sup>15)</sup>。他方、そのブックミラーが、以上の立脚点にもとづい

11) L. Ceppa, *Korsch's Marxism*, *Telos* No. 26, 1975~76, p. 18. ただしこの引用は Kellner, *op. cit.*, p. 112, n. 119. によった。なお、ケルナー編の同書273ページの註(15)もあわせて参照されたい。

12) M. Buckmiller/J. Kammler, *Revolution und Konterrevolution ; Eine Diskussion mit Heinz Langerhans*, C. Pozzoli (herausg.), *Über Karl Korsch*, S. 267~291.

13) Heinz Langerhans (1904~ ) の略歴については、前掲討論集のはじめにおかれた紹介を参照されたい。

14) 念のために見出しだけを簡単に紹介しておけば、この討論集は「I. 党の粛清」、「II. 抵抗」、「III. ファシズムと世界革命」、「IV. マルクス主義の破壊？」の4つにわかれ、主としてブックミラー——ときにはカムラー——が質問者の側にまわり、ランゲルハンスがそれに答える形で議論がすすめられている。

15) ブックミラーの立場をもう少し補足、紹介しておけば、すでに本文で述べたランゲルハンスの晩年のコルシュ解釈に反論して、たとえば彼はつぎのように主張している。「ほかでもなく、コルシュが今日もつ意義を考慮にいれるなら、彼が生涯の終わりにのぞんでマルクス主義と訣別したと主張するのは、正しくないように思われます。たしかに彼は一面ではマルクル主義に疑問を投じました。だが、他面では、彼は、労働運動の中のマルクス主義的運動形態およびその他の形態が歩んできた道を踏まえて、

て、「コルシュはマルクス主義の批判を徹底的におしすすめたあげく、事実上、自己本来の前提、つまりマルクス主義を破壊する結果におちいったというのか」という質問をつきつけて、ランゲルハンスに語気鋭く迫るのにたいして、ランゲルハンスはすかさず、「まさにそのとおり」と答え、「チューリヒ・テーゼ」のあれこれの命題を例にあげながら、悠然として、自説を開陳してやまない。とはいえ、たしかに一面では、そのランゲルハンスも、「もしコルシュがもっと長生きをしていれば、彼が再三再四マルクス主義の原点 (Ansatz) にたちかえただろう」<sup>16)</sup>ことは自分も信ずるといい、あるいは「自己の身邊に存在する教条主義的マルクス主義とそれの妨害作用にたいして、非教条主義的でプラグマティッシュなマルクス主義を、しかも国際的な階級闘争と関連づけながらプラグマティッシュに展開しようとしたコルシュの不断的努力」を高く評価するにやぶさかでない<sup>17)</sup>。だがそれはあくまでも事柄の反面であって、こと「チューリヒ・テーゼ」になると、ランゲルハンスは、このテーゼが「コルシュのマルクス主義的立場の不断的変化の一步一步がうみだした帰結」であり、「このテーゼで、コルシュが労働運動の特定の形態やロシア革命およびその先例ばかりでなく、ついにマルクス主義そのものをもマルクス主義的に批判している」ことを力説してやまない<sup>18)</sup>。こうした観点からテーゼ全体を解釈することによって、彼は運動論の立場から眺めた場合のこのテーゼの核心を、

(1) 「なお終結していないプロレタリアートの闘争の総体にたいする労働運動の

---

実践とその理論のへてきた諸形態にたいする首尾一貫した徹底的な批判を定式化し、それによって新しい形態の下での労働運動のよりいっそうの発展の可能性の緒をひらいたところの、きわめて数すくない人々の一人なのです。したがって、われわれは、歴史的な労働運動そのものによって特殊な在り方をするを余儀なくされたマルクス主義とその弱さとははっきり理解するすべを、コルシュから学ばなくてはなりません。」(Buckmiller/Kammler, *op. cit.*, S. 285)

16) *Ibid.*, S. 286.

17) *Ibid.*, S. 286.

18) *Ibid.*, S. 288.

あれこれの潮流や理論のうちのあるものの独占権の主張を拒否すること」、(2)「階級闘争のあらゆる可能的形態にたいして非教条主義的に対処すること」、の2点にまとめている<sup>19)</sup>。

## II

運動論に焦点を絞り、そこから「チューリヒ・テーゼ」全体を眺めることによって、老ランゲルハンスが、このテーゼのメッセージを、(1)プロレタリアートの自己解放運動のなかでマルクス主義の占める位置の徹底した相対化の主張と、(2)それに対応するプロレタリアートの自己解放の運動と理論の多次的把握の要請という2点の組み合わせのなかで読みとろうとしたとすれば、一面では「チューリヒ・テーゼ」の見方では彼とよく似た視点を採用しながら、にもかかわらず、晩年のコルシュの立場をいぜんとして広い意味でのマルクス主義の枠内で捉えるという、ランゲルハンスと対蹠的な結論を導き出したのが、P・マティックの論文「カール・コルシュのマルクス主義」である<sup>1)</sup>。それはわたくしの知るかぎり、もっとも早い時期に書かれたコルシュ論の一つであって、僅々12ページの短かい論文にすぎないけれども、筆者自身がコルシュのアメリカ時代の親しい友人の一人であっただけに<sup>2)</sup>、その淡々たる叙述にもかかわらず、いまは亡き友の死を悼む筆者自身の切々たる気持が行間からおのずからにじみでていて、読む者の心を打たずにおかない好論文となっている。

彼はこの論文において、一方で温かいヒューマンな目でもって運動家として

---

19) *Ibid.*, S. 289.

1) P. Mattick, The Marxism of Karl Korsch, *Survey*, No. 53, 1964, pp. 86~97.

2) マティックの簡単な略歴とコルシュとの関係についてはつぎのものを参照。D. Kellner, Korsch's Revolutionary Marxism, Karl Korsch, *Revolutionary Theory*, p. 110, n. 9. Buckmiller, Zeittafel zu Karl Korsch, Pozzoli (herausg.), *Über Karl Korsch*, S. 105.

のコルシュの足蹟全体をたどるとともに<sup>3)</sup>、他方、思想家コルシュの問題意識の核心を、労働者階級の革命的自己解放の運動のそれぞれの段階にもっとも適合的な意識形態は何かという問いに求め、そうした観点から『マルクス主義と哲学』を中心に、その他彼のレーテ論、『カール・マルクス』、「チューリヒ・テーゼ」などを祖上にのせて、そのマルクス主義思想史上の意義と運動史上の役割を明らかにしようと試みている。以上の方法的態度にもとづいて「チューリヒ・テーゼ」の内容の紹介に入るに先立って、彼もまた、このテーゼが一見したところ「コルシュのマルクス主義との完全な訣別」<sup>4)</sup>を示しているかに見えることを否定しない。けれども、テーゼの紹介をとおしてそこから彼が導き出した結論はこうである。「これらのテーゼの新しい点は、そこにみられる語調だけである。その他の点では、これらのテーゼは、マルクス主義を労働者革命との関連で明らかにするというコルシュが終生没頭してきたマルクス主義との批判的なかわりあいを要約しただけにすぎないし、またマルクス主義自体は、歴史的発展のある特定の段階以上のものを充分には理解できないのではないのか、という彼の確信からでてきた一つの帰結なのである。」<sup>5)</sup>

では、以上のような批判的態度にもとづくマルクス主義との理論的実践的かわりをとおして、コルシュはこのテーゼでマルクス主義にかんしてどのような結論に到達したのであろうか。その点について、マティックはさしあたりつぎのように答える。すでに1920年代の終わりに到達していた「マルクス主義の正統的教義、なかんずくそのレーニン主義版にたいするコルシュの批判」は、レーニン主義の胎芽がマルクスの思想そのものにひそんでいることを発見したことによって、いまやこのテーゼでは「最終的にマルクス主義自体の一批

---

3) マティックがこの論文で述べている運動家としてのコルシュの履歴の前半の部分(1926年、KPD除名まで)は、平井俊彦氏により巧みに要約紹介されている。平井俊彦「カール・コルシュの実践の弁証法」、『経済論叢』, Vol. 98, No. 1, 1968, 3～8ページ。

4) P. Mattick, *op. cit.*, p. 95.

5) *Ibid.*, p. 96.



判に、またそのことによっていうまでもなく、自己批判」になっている<sup>6)</sup>。

とするなら、コルシュはこのテーゼで、すでにランゲルハンスも主張していたように、結局はやはりマルクス主義と袂をわかったというべきではないのか、問題はおのずからこのように提起されるはずだが、以上の問いにたいするマティックの解答はいささか微妙である。すなわち、彼はコルシュが1938年に『リヴィング・マルクスズム』第4巻第4号に発表した論文「マルクス主義とプロレタリア的階級闘争の現代的課題」の一節からの引用をまじえながらつぎのように述べて、問題全体をしめくくっている。「批判の矛先はくきわめて広い意味でマルクス主義的運動と呼ばれてよいもの、つまり国際的労働者階級の自立的革命的運動にむけられている」のではない。マルクス主義が己れの様々な段階のすべてにおいて、一点の曖昧さもない仕方での革命運動に仕えるうえで欠ける点のあったことが批判の対象となっているのである。」<sup>7)</sup>

「チューリヒ・テーゼ」で、コルシュはマルクス、エンゲルスをも含めた旧来のマルクス主義全体の在り方を批判し、あわせて過去における自己自身のマルクス主義とのかかわり方を自己批判しはしたけれども、にもかかわらず、彼は広い意味でのマルクス主義的運動の立場をはなれたことはなかった。マティックのいわんとするところを一言で要約すれば以上のようになると思われる

---

6) *Ibid.*, p. 96.

7) *Ibid.*, pp. 96~97. ただしコルシュの原文ではつぎのようになっている。「さきに提起した批判の全体は、徹頭徹尾神秘化された＜革命的なマルクス主義学説＞をそっくりそのまま適用するために、これを＜保持＞または＜復活＞しようとした過去50年にわたるイデオロギー的努力にたいしてのみかかわるものであることを了解されたい。この論文では、マルクス、エンゲルスやその信奉者のなかのごく少数の人々が社会研究の多様な分野で達成したところの、多くの点で今日妥当する科学的成果にたいしてはなにひとつ批判はむけられていない。とりわけ、この論文では、きわめて広い意味でマルクス主義的運動と呼ばれてよいもの、つまり国際的労働者階級の自立的革命的運動はまったく批判の対象とされていないのである。」(Marxism and the Present Task of the Proletarian Class Struggle, Karl Korsch, *Revolutionary Theory*, 1977, p. 193.) マティックの引用が一面的であることに注目したい。

が、そうしたマティックの解釈の線を一面で継承しながら、他面で彼のいう広い意味でのマルクス主義的運動の立場の理論的内容をコルシュによるマルクス主義思想そのものの解釈の進化の線にひきよせながらより明確に規定しようとしたのが、コルシュのベルリン時代の弟子で、コルシュの死後、彼の著作の再刊や論文集の編集と刊行に尽力するさなかに中道で倒れたE・ゲルラッハである<sup>8)</sup>。彼はコルシュの『マルクス主義と哲学』を1966年に再刊するにあたり、「カール・コルシュにおける革命の哲学からプロレタリア的行動の科学的理論へのマルクス主義の展開」<sup>9)</sup>という力のこもった序説を寄せているが、そのむすびで彼もふたたび、「チューリヒ・テーゼ」を素材に、晩年のコルシュとマルクス主義との関係の問題をとりあげている。コルシュは——いっそう展開された形においては——マルクスによる資本主義の根本的分析の妥当性を信じ、また「反革命」<sup>10)</sup>の終焉と労働運動の新たな興隆を不可避だと考えたけれども、だからといって直ちに「来たるべき運動が、これまでの意味で、マルクス主義的運動になるだろうとは予想しなかった。」そうした予想にもとづ

---

8) Erich Gerlach (1910～1972) については、コルシュとの関係もふくめて、ザイフェルトが心のこもったオビチュアリを書いている。Pozzoli (herausg.), *op. cit.*, S. 13～14.

9) E. Gerlach, Die Entwicklung des Marxismus von der revolutionären Philosophie zur wissenschaftlichen Theorie proletarischen Handelns bei Karl Korsch, Karl Korsch, *Marxismus und Philosophie*, Frankfurt 1966, S. 5～30.

10) コルシュは、ソビエトにおける左翼反対派の敗北に、「富農(クラーク)、ブルジョワジーの残存分子、党＝国家装置のスターリン主義的要素の利害」の「革命的労働者階級の諸勢力」にたいする勝利(ロシアにおける「ブルジョワジーの反革命」の勝利)をみ、その支配体制のファシズムやナチズムの支配体制への歩み寄りを説くとともに(D. Kellner, Korsch's Revolutionary Marxism, *op. cit.*, p. 93, 233), 「ニュー・ディールの準ファシズム的性格」(*ibid.*, p. 233)を指摘することによって、ブルジョワ民主主義をも彼流の「反革命」の範疇にいった。彼はイタリアにおけるファシズムの勝利にはじまり、ナチスの権力獲得をへてスペインにおけるフランコの勝利をもって一段落をつける過程を、こうした国際的「反革命」の勝利と労働者階級の全面的敗北の過程としてうけとった。

いて、「彼がマルクス主義にたいして 将来そのようにふるまうよう割り振った役割」をくわしく述べたのが、「チューリヒ・テーゼ」である<sup>11)</sup>。

「チューリヒ・テーゼ」が理論家兼運動家としてコルシュが歩んできた長い道のりのなかで占める位置と意義を運動論の視角から以上のように規定した上で、ゲルラッハもまたテーゼの内容を概観するのだが、その結論として彼がさしあたりひきだしたのは、「全体として《チューリヒ・テーゼ》はマルクス主義にたいする批判的態度の一つの極端な形態になっている」というきわめて卒直な印象である<sup>12)</sup>。だが、ゲルラッハは、この印象から晩年のコルシュがマルクス主義を放棄したという結論を早急に導き出すことをいまして、1956年12月16日付のルート・フィッシャー宛のコルシュの手紙の参照を求める。というのも、この手紙のなかで、コルシュはフィッシャーに自己の近況を伝えるとともに、マルクス＝レーニン＝スターリン主義の狭搾衣を着せられることによって圧殺されたかにみえる「マルクスの理念」の「復活」の夢を語っているからである<sup>13)</sup>。ゲルラッハはコルシュの以上の夢を、さらにスターリン批判以後に生じた東欧共産主義圏の激動やいわゆる第3世界における革命運動の進展にたいするコルシュの注目と関心に結びつけ、そうした脈絡のなかに「チューリヒ・テーゼ」を捉え直すことによって、このテーゼの思想的内容の核心を、「将来の社会主義的理論のよりどころを、もはや過去のものとなった姿のままマルクス主義を＜復活＞することではなくて、すべての哲学的思弁的要素から解放され、よりいっそうの展開をとげたマルクス主義の方法を新しい歴史的発展に適用することに求める」<sup>14)</sup>ように要請している点に見出した。

以上、その一端をかいまみたように、マルクス主義者としてのコルシュの思想的歩みをプロレタリアートの革命の哲学からプロレタリア的行動の科学的理

---

11) E. Gerlach, *op. cit.*, S. 27～28.

12) *Ibid.*, S. 29.

13) *Ibid.*, S. 29～30. なおこの点については、第3節の資料2を参照されたい。

14) *Ibid.*, S. 30.

論へという発展図式のなかで捉え、晩年のコルシュに後者の意味でのマルクス主義理論の先駆者を読みとろうとしたのが、ゲルラッハによる晩年のコルシュのマルクス主義論の基本的立場であったが、これにたいして、同じコルシュのマルクス主義を「批判的マルクス主義」<sup>15)</sup>、もしくは「非教条主義的マルクス主義」<sup>16)</sup>として規定し、その特色を、マルクス主義の理論的諸形態をそのときの労働者階級の解放運動の在り方と関連づけ、絶えず批判的に捉えなおすことによって、一方で「マルクス主義における生けるものと死せるもの」<sup>17)</sup>とをその都度弁別するとともに、それをとおしてマルクス主義の教条主義への硬化をふせぎ、これに絶えず新しい息吹きを吹き込もうとした点に求めたのが、ケルナーである。

すでに本節註(7)で示したコルシュの一文も示すように、彼のマルクス主義把握の特色は、マルクス主義を(1)国際的労働者階級の自立的革命運動の理論的表現として規定するとともに、(2)これを一つの科学的な理論として理解するという2面の統一からなっていた。と同時に、そうした彼のマルクス主義把握は、他面でケルナーも鋭く指摘しているように<sup>18)</sup>、ついにこの2つの面の適切な媒介に到達しえなかった点で、重大な問題性をはらんでいた。このように一方ではコルシュのマルクス主義把握の問題性を鋭く見抜きながら、にもかかわらずその特色を以上の2面の統一のなかにみることにより——とはいえ、(1)の面に力点をおきながら——ケルナーは、マルクス思想の社会科学としての特質の肯定的評価と解説に力をそそいだコルシュの『カール・マルクス』を「一大傑作」と呼んで高く評価するチェパヤ、コルシュの純粋に「科学的なマルクス主義」(力点は重田)を称揚するマラマオのコルシュ評価の在り方を、それと逆に

15) Kellner, Korsch's Revolutionary Marxism, Karl Korsch, *Revolutionary Theory*, p. 105.

16) *Ibid.*, p. 9, 101.

17) *Ibid.*, p. 99, 165, 270.

18) *Ibid.*, p. 96.

コルシュの同じ面に「実証主義的マルクス主義」への後退をかぎつけてこれを否定的に評価するマルクーゼやアドルノの評価と同様に、コルシュのマルクス主義把握の(1)の面をみおとした一面的な誤った解釈としてしりぞける<sup>19)</sup>。

他方、ケルナーによれば、彼の強調するコルシュのマルクス主義把握の(1)の側面は、すでにみた彼の「批判的」「非教条主義的な」マルクス主義へのアプローチとあいまって、国際的な「反革命」<sup>20)</sup>の勝利と労働者階級の全面的敗北という状況の下で、この敗北をマルクス主義的運動の危機として捉え、その源を、(1)マルクス主義のこれまでの諸解釈のなかばかりでなく、(2)さらにさかのぼってマルクス、エンゲルスの理論そのもののなかにも求めるところまで進ませた。1927年の執筆にかかると推定される「マルクス主義の危機」<sup>21)</sup>はその発端をなし、こうしていまやコルシュのなかに姿を現わしはじめたマルクス主義そのものにたいする危機意識とそれにもとづくマルクス主義総体の批判的再検討への志向は、1938年に『リヴィング・マルクシズム』第4巻第4号に匿名で発表された「マルクス主義とプロレタリア的階級闘争の現代的課題」<sup>22)</sup>をへて、やがて1950年の「チューリヒ・テーゼ」において頂点に達する。

コルシュとマルクス主義との関係の一面を以上のように捉えることによって、ケルナーもまた、このテーゼが「コルシュによるマルクス主義にたいするもっとも根底的な批判」<sup>23)</sup>となっていることを卒直に認める。だが、そこから、彼もチェパなどのように「コルシュはマルクス主義を棄て去ったという判

19) *Ibid.*, pp. 97~100. と同時に、ケルナーは、コルシュが最初からヘーゲルの摂取にさいして「高度に批判的かつ選択的であった」ことを理由に、彼のマルクス主義を「ヘーゲル的マルクス主義」として規定することにも反対している (*Ibid.*, pp. 99~100)。

20) 本節註(10)を参照。

21) K. Korsch, *The Crisis of Marxism*, Karl Korsch, *op. cit.*, pp. 171~176. それは7つのテーゼからなり、生前は未公表のまま放置されていた。

22) ケルナーは、この論文がマルクス思想の社会科学としての特性の肯定的評価と解説とを前面に押し出した『カール・マルクス』と同じ年に公刊されている点に、特に注目している。

23) D. Kellner, *op. cit.*, p. 272.

断」<sup>24)</sup>を下したかという、事実はその正反対であって、彼はこうしたチェバナなどの判断をきっぱりとしりぞけて、つぎのようにいう。コルシュは「マルクス主義の政治理論と革命理論のあれこれの側面に根本的な疑念を呈したけれども、労働者階級の解放への傾倒、および労働者階級とその闘争とがわれわれの歴史の原動力、目的であり、社会変革の媒介者であるというマルクス主義的確信にたいする傾倒を放棄したことは一度としてなかった。このようにして、コルシュは、資本主義の打倒と社会主義の建設とが主要な課題として歴史の日程にのぼっているというマルクス主義的立場をなげすめたことは決してなかったのである。」<sup>25)</sup>

ケルナーは一方で以上の一般的論拠に依拠しながら「このテーゼ（「チューリヒ・テーゼ」——重田）を楯にとって、コルシュがマルクス主義を棄て去ったと考えてはならぬ」<sup>26)</sup>というのだが、そうした一般的論拠を補強するものとしてさらに彼が持ち出すのが、このテーゼ執筆以後も、コルシュはマルクス主義にたいする省察を不断におこたらなかったという事実である。その一例として、ケルナーもふたたび、すでにゲルラッハが援用したコルシュのルート・フィッシャー宛の手紙をひきあいに出しているが<sup>27)</sup>、彼の場合、とくに注目に値するのは、それと並んで、ヘッダ夫人の「カール・コルシュの思い出」のつぎの一節をとりあげていることである。すなわち、この「思い出」の最後の箇所ではヘッダ夫人は、晩年のコルシュのことに言及し、彼が「廃止の時代」という標題の著作の執筆にとりかかっていたことを告げ、将来社会における分業止揚論を中心にその構想の一端について語っているが<sup>28)</sup>、ケルナーはこの草稿を評して、「マルクス主義理論のカナメをなしながら、これまで一度として適切に展

---

24) *Ibid.*, p. 101.

25) *Ibid.*, p. 101.

26) *Ibid.*, p. 272.

27) *Ibid.*, p. 272.

28) *Ibid.*, p. 102. よりくわしくは次節の資料3、とくに173ページを参照。

開されたことのなかった問題意識をとりあげようとしたもの」<sup>29)</sup>だといって、これを高く評価している。

「コルシュはマルクス主義とは何かということをトコトンまで考え抜くとともに、マルクス主義に根本的な疑問を投げかけた歴史の一時期を生き抜いた。コルシュ自身はマルクス主義の現代的地位と将来の運命にたいする最終的審決に達したことは一度もなかったし、歴史の運動はなおわれわれをマルクス主義の最終的死亡記事 (obituary) もしくは哀歌を書く位置においていない。」<sup>30)</sup> 理論と実践との間を不断に往復するなかで、マルクス主義とは何かという問いを終生投げかけつづけてやまなかった「批判的」、「非教条主義的」マルクス主義者、カール・コルシュと彼の生きた時代とを、ケルナーは以上のように要約している。

### III

以上、わたくしは、コルシュのいわゆる「チューリヒ・テーゼ」を中心に晩年の彼とマルクス主義との関係について論じたいいくつかの論稿をとりあげ、これを2つのタイプに分けた上で、それぞれの解釈の特徴の一斑を紹介してみた。と同時に、これらの紹介を通じて明らかになったことは、(1)このテーゼはバラバラに切り離されて読むべきではなく、一定の視点のもとに相互に有機的に関連づけながら統一的に読まれるべきこと、(2)のみならず、このテーゼはそれに前後するコルシュの論文はもとより、書簡や未完成の草稿類とも関連づけ、そうした脈絡のなかで捉えなくては真の位置づけが不可能なこと、(3)さらに、このテーゼはそれに至るまでの理論家兼運動家としてのコルシュの関歴全体の凝集点として捉えられねばならぬこと、などであった。ところが、(3)の問題はさておいて、(1)と(2)の問題にかぎってみても、今日までのところ、わが国

---

29) *Ibid.*, p. 102.

30) *Ibid.*, p. 102.

ではその前提をなす資料自体の内容がなお公知の事実となっているとはいいいがたい。ところが、すでに紹介した諸論稿の内容から明らかなように、晩年のコルシュとマルクス主義との関係をめぐるさまざまな解釈についてわれわれ自身の判断を下そうと思うなら、まずそれに先立って、これらの諸解釈でとりあげられてきた「チューリヒ・テーゼ」とそれをとりまく関連の諸資料の内容を予め正確に知っておくことが、必須の先決条件である。以下、本節ではそうした条件をみたす目的で、これらの諸資料の主要な部分のわたくし自身の試訳をかかげるとともに、ひきつづき節をかえて、これらの諸資料とつきあわせながら、前2節で紹介した諸解釈を吟味し、あわせてわたくし自身の感想の一端を記すことにしよう。なお、諸資料の試訳の前におかれた簡単な解題と脚註とは、わたくし自身によるものである。

#### 資料1 「今日のマルクス主義に関する10のテーゼ」

ブックミラーの作成したコルシュ年譜によれば、彼は1950年7月から9月にかけてヨーロッパを旅行し、ブレヒトと久しぶりに旧交をあたためたり、あるいはアムステルダムの社会史国際研究所を訪ねてネトラウの『バクーニン伝』<sup>1)</sup>を読んだりした。と同時に、そのかたわら、ハノーヴァー、ゲッティンゲン、バーゼル、チューリヒ、ベルリンで、(1)「アメリカ合衆国と世界状況」、(2)「中国革命」、(3)「現代マルクス主義」などの演題で講演をしたといわれる<sup>2)</sup>。いわゆる「チューリヒ・テーゼ」と称せられる以下の「今日のマルクス主義に関する10のテーゼ」は、1950年に執筆され、チューリヒでおこなった講演のさいに配布されたといわれているが、その後ながらく放置したままでおかれ、1959年にはじめて『アルギュマン』第3巻第16号にフランス語訳が発表され、1965年

1) 研究所所蔵のネトラウの『バクーニン伝』草稿のもつ意義については、水田洋『霧の国太陽の国；社会思想の旅』、河出書房新社、1963年、166～169ページ参照。

2) Buckmiller, Zeittafel zu Karl Korsch—Leben und Werk, Pozzoli (herausg.), *Über Karl Korsch*, 1973, S. 106.



になってやっと『アルターナティヴェ』第41号にドイツ語原文で公表された。けれども、いわゆる「ミニコミ」に近いこれらの雑誌の性格もあって、わが国では普通一般のものは容易にこのテーゼに接することができなかった。それが一般の目にとどくようになったのは、『マルクス主義と哲学』の仏訳版(1964年)の付録の一つにこのテーゼがくわえられ(pp. 185~187)、さらにゲルラッハ、ザイフェルト共編のコルシュの『政治論集』が1974年に公刊されたさいに、その一篇としてこのテーゼが収録されて以後のことである<sup>3)</sup>。

I. マルクスとエンゲルスの学説が今日なお、どの程度理論的に妥当し、実践的に適用可能であるのか、というように問題を立てることは、もはやまったく無意味である。

II. マルクス主義学説を全体として、しかも労働者階級の社会革命の理論としてのその本来の機能において復活しようとする試みは、今日では、おしなべて反動的ユートピアである。

III. とはいうものの、よかれあしかれ、マルクス学説の主要な構成部分には、機能を異にし、舞台を変えながら、今日なお有効性を発揮している。それにまた、これまでのマルクス主義的労働運動の実践が重要な誘因となって、今日、諸国民、諸階級の間で実践上の対決が生じている。

IV. 革命的な理論と実践の再建のための第1歩は、革命の主導権と理論的実践的指導にたいして独占権を要求するマルクス主義の主張と袂をわかつことである。

V. 今日では、マルクスは労働者階級の社会主義的運動のあまたの先駆者、創始者、推進者のなかの一人にすぎない。トーマス・モアから現代までのいわゆる《空想的社会主義者たち》もおなじように重要である。ブランキのようなマルクスの偉大な競争相手、プルドンやバクーニンのようなマル

---

3) Karl Korsch, *Zehn Thesen über Marxismus heute*, Karl Korsch, *Politische Texte*, herausg. von E. Gerlach/J. Seifelt, Frankfurt/Köln, S. 385~387. Karl Korsch, *Revolutionary Theory*, ed. by D. Kellner, pp. 281~283.

クスの不倶戴天の敵もまた、おなじように重要である。最後に、ドイツの修正主義、フランスのサンディカリズム、そしてロシアのボリシェヴィズムによってなされたような後代のもろもろのいっそうの発展もまた、おなじように重要である。

VI. マルクス主義のなかでとくに批判的な取り扱いを要する点は以下のとおりである。

1. ドイツにみられるような、さらにまた、マルクス主義が比較のおくれて政治的意義を獲得することになった中欧や東欧のその他のすべての国々にみられるような、未発達の経済的・政治的諸条件に実際上依存していること。

2. ブルジョワ革命の政治的諸形態に無条件に固執していること。

3. すべての国が将来向かう発展のモデルとして、また社会主義への移行の客観的前提条件として、イギリスの先進的な経済的諸状態を無条件に受容したこと。くわえるに、

4. このような諸条件を突破するために、マルクス主義が再三再四、死にもの狂いになって、矛盾をものともせずを試みたもろもろの企てからうまれた諸結果。

VII. これらの諸条件に起因してつぎのことがらが生じた。

1. 社会革命の決定的用具として国家を度はずれに強調したこと。

2. 資本制的経済の発展と労働者階級の社会革命とを同一視するという神秘化におちいったこと。

3. 一面ではブランキに対抗するなかで、他面ではバクーニンに対抗するなかで展開された共産主義革命の2段階論<sup>4)</sup>を人工的に接木することによ

---

4) 『ゴータ綱領批判』の「共産主義の2段階区分」(望月清司訳、岩波文庫、1975年、訳者解説226ページ)をさしていわれたもの。周知のように、マルクスはこの評註で、共産主義社会を、「生産手段の共有にもとづいた協同組合的な社会」という共産主義社会の「第1段階」(同上訳書、35～38ページ)と、「共産主義社会のより高度の段階」、つまり「諸個人が分業に奴隸的に従属することがなくなり」、「労働が……生活にとってまっさきに必要なこと」となり、「協同組合的な富がその泉から溢れるばかりに湧

て、マルクスの革命理論の先述した最初の形態は、後年曖昧ないっそうの展開をとげることになった。というのも、この２段階論は、労働者階級の真に現実的な解放を現今の運動から呪文によって雲散霧消させ、この解放を不確定の未来にひきのばしたからである。

Ⅷ. レーニン型の、あるいは ボリシェヴィキ型の マルクス主義の いっそう展開された形態がはめこまれたのは、ほかならぬこの点においてであって<sup>5)</sup>、まさにこうした新形態をまとめて、マルクス主義はロシアとアジアに移植されたのである。と同時に、それにとまって、マルクス主義的社会主義は一つの革命理論から一つのイデオロギーへと展開をとげ、このイデオロギーをさまざまな目標の一大系列に仕えさせることが可能となったし、また仕えさせられもした<sup>6)</sup>。

---

きでようになったのち」の社会（同上訳書、38～39ページ）という２つの発展段階に区分している。

- 5) この一節については、ケルナーのつぎの解釈が示唆にとんでいる。「彼（コルシュ＝重田）の考えでは、社会主義から共産主義への移行の＜２段階論＞に関するマルクスの理論は、社会主義のより高度の段階の建設を不確定の未来へ引き延ばすもつつけの口実を与えた。ソビエト連邦は移行の第１段階にあるにすぎず、社会主義のより根底的な諸要求の実現は将来に延期されねばならない、と主張することによって、スターリンが自己の反革命的政策を正当化したのをみれば、この問題はソビエト連邦の現実の発展のなかではっきりした、と彼は信じた。」(D. Kellner, *Korsch's Revolutionary Marxism, op. cit.*, p. 81)
- 6) この第Ⅷ命題については、ふたたびケルナーのつぎの叙述がかえりみられるべきであろう。コルシュは「マルクス主義＝レーニン主義について論じて、それは、ロシアにおける資本主義の発展を合法化し、またソビエト制度は真に＜社会主義的＞であるという神話を創造するためのイデオロギーとして、利用されたといった。当初から、レーニンは資本制の発展と重工業化の段階を通過することがぜひとも必要だと主張していたし、また社会主義的イデオロギーによってヴェールをかぶされた資本主義の諸特徴を復活する上で、彼の比類のない影響力を行使した。さらに悪いことに、レーニン没後、レーニン主義は直落をとげて、＜現実的傾向からいえば資本制国家であり、かくして不可避免的に、プロレタリア階級の進歩的革命的運動の抑圧に基礎をおいた国家であるものを、イデオロギー的に弁護することになった＞。」(D. Kellner, *ibid.*, p. 147.) なお＜＞内の文章はコルシュの *The Marxist Ideology in Russia*, Karl

IX. こうした立場に立つことによって、1917年と28年<sup>7)</sup>の2つのロシア革命を批判的に理解することができるし、またこうした立場から、今日アジア諸国で、また世界的規模でマルクス主義がはたしているさまざまな機能も、これを規定することができる。

X. 労働者が自己自身の生活の生産を自己のおもいどおりにすることは、生産手段の独占的所有者がみずから廃止しつつあるいわゆる自由競争が、国際的諸市場や世界市場で放棄している地位に、彼らにかわってつくことから生ずることはなかるう。それは、今日ではすでにあらゆる点で独占的にかつ計画的に規制される傾向の強まりつつある生産に、目下のところ（それから）しめだされているすべての階級が計画的に介入することから、はじめてうまれ得ることができるのである。

資料2 1956年12月16日付、ルート・フィッシャー宛の手紙<sup>8)</sup>

この手紙は直接に彼女に送られたものではなく、同日付のゲルラッハ宛の手紙に同封され、彼女に渡すよう託されたものである。

自動車工場労働者の大衆集会に参加するために、急におもいたって、デトロイトにでかけました。旧くからの友人や新しい友人から歓待をうけましたが、それを手がかりに、さらになにかを築き上げる段になると、とうてい時間がたりませんでした。わたくしには合衆国は荒野にも等しい土地ですが、そういった国に住むわたくしにとっては、もう一度ふたたび生粋の労働者の

---

Korsch, *Revolutionary Theory*, ed. by. D. Kellner, p. 163 からの引用である。なお、この論文は1932年に *Gegner*, February 5 にドイツ語で発表した論文を基礎に、さらにそれを拡充したもので、1938年3月に、*Living Marxism*, Vol. 4, No. 2 に英語で発表された。

7) 1928年に発足した第1次5ヶ年計画と、それにもとづく農業集団化と工業化の推進をさすのではないと思われる。

8) Brief an Ruth Fischer am 16, 12, 1956, Karl Korsch, *Politische Texte*, 1974, S 394. Karl Korsch, *Revolutionary Theory*, 1977, p. 295.

間に身をおくことは、もうそれだけで、みちたりた気分になります。例によって例のごとく、わたくしの理論的、政治的傾向に活力を賦与するために、すばらしいもろもろの計画を立てています。だが同時に、マルクス＝レーニン＝スターリンという挿話の時期の終焉を迎えた今日、その間に根絶されたかにみえる《マルクスの理念》を理論的に復活するもうひとつの夢にいまなおしがみついています。

### 資料3 ヘッダ・コルシュ「カール・コルシュの想い出」<sup>9)</sup>

この「想い出」は『ニュー・レフト・レビュー』の編集部が、1972年9月ニュージャージー州のフォートリー在住のヘッダ夫人を訪ね、夫人にたいしておこなったインタビューの記録を活字化したものである。内容全体は、「コルシュの生い立ちと家庭的背景」、「大学時代のこと」、「滞英時代（1912～14年）」、「第1次大戦中の軍隊での活動」、「第1次大戦後のドイツでの理論的政治的活動」、「ルカーチとの出会いと関係」、「亡命生活、とくに渡米後の彼の生活」などについて、予め編集部の側で用意した11の質問に答える体裁をとっている。以下に抄訳するのは、1936年に渡米して以後のコルシュの動静のうち、晩年の生活についてヘッダ夫人が語った内容の一部である。

彼は晩年には、世界の革命運動のゆくすえについて、悲観的な見方におちいていました。ソビエト連邦については、まったくといっていいほど、そうでした。スターリンの死後ですら、なにかが期待できるとは決して思いませんでした。中国革命については、いうにただけの一定の明確な評価をくだせるまでに至りませんでした。それ以前に健康をそこねてしまった（1957年）<sup>10)</sup>からです。とはいっても、中国で起こりつつあることには多大の関心をはらっていましたし、それに彼といたら、蒋介石の旧敵で、この関係

9) Hedda Korsch, *Memories of Karl Korsch*, *New Left Review*, No. 76, 1972, pp. 34～45.

10) 第1節の註(7)で記したように、この年コルシュは入院した。

ははるか昔にドイツにいた時分にまでさかのぼるものです。最後のヨーロッパ旅行のさい<sup>11)</sup>、彼はユーゴスラヴィアを訪れ、よい印象をうけました。だが彼の考えでは、この国はとても幼稚で、はたしてどこまですすむことができるのか、またその過程でどのような変貌をとげることになるのか、見当のつきかねる点を感じました。彼は植民地諸国にもっぱら望みをかけました——これらの国々はますます重要性をまし、これにたいしてヨーロッパの重要性はうすれるだろう、彼にはこのように思われたのです<sup>12)</sup>。

「マルクス主義に関する10のテーゼ」という標題で彼が1950年におこなった講演<sup>13)</sup>は、誤解を招きやすい内容のもので、マルクス主義を否認したものではありません。後年、「これらのテーゼ」を印刷することをわたくしは承認したものの、それは元来公表を予定したものではなかったのです。晩年の最後のきわまで、彼の関心の中心はマルクス主義にありました。とはいっても、彼は自分なりに理解したマルクス主義を新しい発展に、それもとわりわけ2つのやり方で適応させようとしたのです。その一つは、さきほどの話にもできましたように、植民地世界を研究することによってでした。彼の考えでは、初期のマルクス主義は、十分な理由があつてのうえですが、もっぱらヨーロッパに関心をそそいできました。だが今日では、目くばりの範囲をもっと広げる必要がある、彼はこう考えました。こうした考えと結びついて、世界史家たちにたいする彼の関心がうまれたのです<sup>14)</sup>。フィリッピンについて論じた1946年の論文<sup>15)</sup>で、植民地の独立が名目的なものにすぎな

11) コルシュは1956年に再度渡欧した。第1節の註(7)を参照。

12) この点については、ブレヒト宛のつぎの手紙が示唆に富む叙述を残している。Letter to Bertolt Brecht, April 18, 1947, Karl Korsch, *Revolutionary Theory*, p. 287.

13) この講演については資料1のはじめの解題を参照。

14) Karl Korsch, *The World Historians. From Turgot to Toynbee, Partisan Review*, Vol. 9, No. 5, New York. (Buckmiller, *Bibliographie der Schriften Karl Korsch*, Pozzoli (herausg.), *Über Karl Korsch*, S. 99),あるいは註12で示したブレヒト宛の手紙でのトインビーへの批判的言及 (K. Korsch, *op. cit.*, p. 287) など。

15) Karl Korsch, *Independence Comes to the Philippines, Asia*, Vol. 21, No. 11. (Buckmiller, *op. cit.*, S. 100.)

いことを、彼はかなりはっきり見抜いていました。この時期のもう一つの彼の主要な関心は、他の諸科学の進展に太刀打ちできるように、マルクス主義の拡充をはかることにありました。マルクスの時代以後、資本制社会は発展をとげたのだから、マルクス主義もまたそれを理解できるようにいっその発展をはからなければならない、彼はこう考えたのです。「廃止に関する草稿」という未完成のテキスト<sup>16)</sup>は、わたくしたちの社会を構成するもろもろの分裂——たとえば、さまざまなちがった階級の間の分裂、都市と農村の間の分裂、精神的労働と肉体的労働との間の分裂がそれですが——をやがて将来廃止する見地から、マルクス主義の歴史発展の理論の展開をはかろうとしたものです。

#### IV

さて前節の「チューリヒ・テーゼ」を卒読してひとまず受ける印象は、このテーゼをとりあげた論者が一様に認めたように、それがマルクス主義自体にたいするきびしい批判になっていること、しかもその批判が予想以上に徹底したものであることであろう。したがって、いったんこのテーゼをそれを構成する個々の命題に分解したうえで、一定の視点からそれらの断片のいくつかを拾い上げ、これを相互につなぎあわせるなら、棄教者コルシュという晩年のコルシュの思想家像を刻み上げることはそれほどむずかしい作業ではない。われわれはその端的な例を、すでに紹介した石堂氏の解釈のなかにみいだすことができよう<sup>1)</sup>。他方、目を他の諸論文に転ずると<sup>2)</sup>、事態はそれほど簡単ではない。というのも、晩年のコルシュによるマルクス主義否認説の立場をとるランゲルハンスにしても、他面では、コルシュが存命していれば、いぜんとして繰り返

---

16) *Buch der Abschaffungen*. コルシュがこの草稿に手をつけたのは1952年から54年にかけてであったが、すでに述べた病におかされたために中絶された。Buckmiller, *Zeittafel zu Karl Korsch*, Pozzoli (herausg.), *op. cit.*, S. 102, 106.

1) 本稿第1節154ページの叙述を参照。

2) 本稿第1節155ページで述べた理由により、チェパの論文はのぞく。

しマルクス主義に立ち戻り、これを自己の思索の原点にすえただろうことを疑わないからであり、これに反して、晩年のコルシュにおけるマルクス主義堅持説の立場をとる論者も、その反面で、「チューリヒ・テーゼ」が運動論の面でも、理論内容の面でも、マルクス主義そのものにたいするてきびしい批判を含んでいることをもれなく承認しているからである<sup>3)</sup>。双方の側で同じ認識の次元を共有しながら、しかもなぜ以上のような相互に対立する結論が導き出されることになったのか、結局、解釈の別れ道は——ブックミラーの鋭い問題の立て方を借りると<sup>4)</sup>——マルクス主義の立場から「コルシュはマルクス主義の批判を徹底的におしすすめたあげく、事実上、自己本来の前提、つまりマルクス主義の破壊にまで達したのか」という問いに肯定的に答えるか、それとも否定的に答えるかにかかっているといつてよからう。

すでにみたように、この問いに肯定的に答えたのがランゲルハンスであった。彼は「＜チューリヒ・テーゼ＞はおもいつきで書きとめられた諸命題ではなくて、……コルシュのマルクス主義的立場の不断の変化の一步一步がうみだした帰結」である<sup>5)</sup>というきわめて魅力にとんだ視点を提供し、その「帰結」として「チューリヒ・テーゼ」における自己の前提＝マルクス主義の「破壊」という結論を導き出したのだが、いざ論証の段になると、必ずしも成功しているとはいいがたい。というのも、彼はすでに述べた視点に立ってこのテーゼ全体の構造とそのなかでの各命題の意味と相互連関を吟味することによって以上の結論を導き出したのではなくて、そのかわりにいわば例証主義的に、第Ⅱ命題、第Ⅵ命題の(2)と(3)、第Ⅶ命題の(1)と(2)<sup>6)</sup>、あるいは第Ⅴ命題<sup>7)</sup>を具体例と

3) マテックについては本稿第2節158～159ページ、ゲルラッハについては同161ページ、ケルナーについては同163ページの叙述を参照。

4) 本稿第1節156ページでの引用を参照。

5) M. Buckmiller/J. Kammler, *Revolution und Konterrevolution*, Pozzoli (herausg.), *Über Karl Korsch*, S. 288.

6) *Ibid.*, S. 285.

7) *Ibid.*, S. 286, 287.



してひきあいに出すにとどまり、それによって論証にかえている傾きが強いからである。したがって、ランゲルハンスの所説にたいしては、「チューリヒ・テーゼ」にみうけられるマルクス主義の個々の命題の批判についてはともかく、なぜそれらの批判があい合してマルクス主義総体の根底的批判に転化しているというのかという疑問が、いぜんとして残るといわなくてはならない。

かといって、それに対立する「チューリヒ・テーゼ」におけるコルシュのマルクス主義堅持説を説く論者の所説も、同様に必ずしも説得的とはいえない。これらの論者に共通するのは、テーゼの内容の大づかみな紹介はあっても<sup>8)</sup>、立ち入った分析と解釈はなく、そうしたなかで彼らが自己の主張の論拠としてあげたのは、(1)晩年のコルシュが国際的な労働者階級の自立的な革命運動の立場にいぜんとして立ち、この運動を現代の歴史の原動力とみなしていたこと<sup>9)</sup>、(2)このテーゼ以後にも、コルシュはマルクス主義にたいする関心をすてず、これにたいする省察を終生つづけてやまなかった<sup>10)</sup>、という2点にすぎないからである。だがマルクス主義は、コルシュにあっては、国際的な労働者階級の自己解放運動の理論的表現であるとともに、彼自身も認めているように<sup>11)</sup>、他面で科学＝理論としての一定の体系性をそなえているはずであって、「チューリヒ・テーゼ」にみられるマルクス主義の個々の批判が、この体系性の根底

---

8) マティックは第Ⅵ命題の4と第Ⅶ命題の3を除いて、またゲルラッハは第Ⅰ～第Ⅲ命題と第Ⅵ命題の4を除いて、テーゼ全体にひとわりふれているが、それぞれの命題の内容、まして相互連関の突っ込んだ分析と解釈はほとんどみられない (Mattick, *op. cit.*, pp. 95～96, Gerlach, *op. cit.*, S. 28～29)。ケルナーはテーゼの内容にまったく言及していない。アンソロジーのなかにテーゼ全体が収録されていることが、その理由であろう。だが、そのことが反面で、彼の議論の説得力を弱める結果におちいつていることも否みがたい。

9) マティックについては、本稿第2節159ページ、ケルナーについては同164ページの叙述を参照。

10) ゲルラッハについては本稿第2節161ページ、ケルナーについては同164～165ページの叙述を参照。

11) 本稿第2節註(7)でのコルシュからの引用を参照。なお同162ページの本文でのこの点についての言及を、あわせて参照されたい。

に<sup>・</sup>ひ<sup>・</sup>びをいれることになっていないかどうかという肝心の疑問の点になると、すでに指摘したように、彼らにあっては、「チューリヒ・テーゼ」そのものの綿密な分析と解釈が欠けているために、なにひとつ答えられていない<sup>12)</sup>。

他方、第2の論拠についていえば、コルシュがルート・フィッシャーに語った「マルクスの理念」の内容に、あるいは遺稿「廃止の時代」の分業止揚論の内容にヨリ立ち入った吟味がくえられないかぎり、ランゲルハンス流にいえば、晩年のコルシュが自己の思索の展開にさいしてマルクスに原点を求めたことは充分にいいえても、それを出発点に展開された思索の成果をただちにマルクス主義のヨリ展開された形態として積極的に規定しうるか否か、なお確定的なことはいえないというべきであろう。

このようにみてくると、「チューリヒ・テーゼ」をめぐる評価の対立の根底によこたわるもっとも根本的な問題点の一つは、テーゼの各命題そのものとそれらの相互連関の徹底した分析と解釈、およびそれに基づくテーゼ全体の構造の解明が欠けていることにある。このテーゼは、1950年という時点に立って、コルシュが理論と実践の両面にわたる自己とマルクス主義とのかかわりあいの総決算を示したものであって、(1)各命題は綿密な思索をへた上で相互に密接な有機的連関のもとに配置されるとともに、(2)その全体は、当時のコルシュとマルクス主義との間によこたわる距離を一定の仕方で端的に示しているといつてよい。たとえば(1)の面についていえば、第Ⅰ命題ひとつをとりあげてみてもそのようにいえるはずであって、わたくしには、それは第Ⅱ命題、第Ⅲ命題と切り離しては、その内容の真意を捕捉できないように思われる。

彼は第Ⅲ命題で、マルクス主義の主要な構成部分は<sup>・</sup>機<sup>・</sup>能を異にし、<sup>・</sup>舞<sup>・</sup>台を変えながら今日なお有効性を発揮していることを認めているけれども、この場合

12) 「すべての思弁的要素から解放され、よりいっそうの展開をとげたマルクス主義の方法を新しい歴史的発展に適用する」こと（本稿第2節161ページの引用を参照）に「チューリヒ・テーゼ」の呼びかけの核心をみたゲルラッハの解釈は、以上の疑問に彼なりに真正面から答えているといってもよいが、それがテーゼそのものの分析と結びつけて説かれていないために、説得力に欠けているといわざるをえない。

の舞台とは低開発国もしくはいわゆる第3世界をさし<sup>13)</sup>、他方機能を異にしなが<sup>14)</sup>らというのは、本来労働者階級の国際的自己解放運動の理論的表現であるべきマルクス主義が、これらの国々では、ナショナリズムと工業化（その経済的形態としてはおそらく特殊な型の国家資本主義）という歴史的運動の真の内容をおおいかくし、合理化するためのイデオロギーに機能転化しているという認識であって、彼はその原型を革命後のロシア——とくに1928年以後のロシア——の現実の推移とマルクス主義のマルクス＝レーニン＝スターリン主義への転化のなかにみていた<sup>14)</sup>。第Ⅱ命題は、レーニン＝スターリン主義に骨化したマルクス主義の現代的形態にたいする以上の見方と結びついて立てられているのであって、第Ⅲ命題で提示され規定されたようなイデオロギーに転化してしまったマルクス主義学説の全体（レーニン＝スターリン主義）をそのまま無批判的に先進資本主義国の労働者階級の社会革命の理論という本来的機能において再建しようと試みても、それは所詮「反動的ユートピア」におわるという判断であろう。コルシュにおけるマルクス主義学説（レーニン＝スターリン主義）の内容とイデオロギー的機能についての以上の捉え方がかりに正しいとすれば、マルクス主義全体の根本的な批判的再検討こそ急務であって、それを抜きにして、マルクス、エンゲルスの所説の個々の部分の理論的妥当性と実践的適用可能性を論じて、結局無意味な議論におわることは理の当然であり、こうした脈絡のなかで、はじめて第Ⅰ命題も有意義的なものとして登場することが可能となるはずである。と同時に、他方わたくしには、これらの第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ命題を前提ないし序論として、「革命的理論と実践の再建」という見地から、マルクスの思想そのものをも含めてマルクス主義の総体を、理論と運動の2面にわたって徹底的に再検討したものが、第Ⅳ命題以下の諸命題であるように思

13) いわゆる第3世界へのコルシュの注目については、資料3のヘッダ夫人の「想い出」、とくに172ページ以下の叙述を参照。

14) この点で、第Ⅲ命題は第Ⅷ命題とも有機的連関におかれていることが見落されてはならない。なお、第Ⅷ命題に付した註(6)をもあわせて参照されたい。

われる。

さらにこのテーゼを構成する個々の命題についていえば、すでにランゲルハンスやマティックが強調しているように<sup>15)</sup>、それらはおおむね理論と実践の間の不断の往復運動のなかでコルシュがその都度ひきだしてきたマルクス主義とその他の社会主義諸思想にたいする解釈と評価、あるいはそれに対応する現実の批判的理解と密接に結びついているのであって、この結びつきを抜きにしては、われわれはこれらの命題の大部分を正確に理解することはできないであろう<sup>16)</sup>。では、そうした諸命題の一つ一つの解釈とそれにもとづくこれらの命題の間の相互関連の分析にもとづいて「チューリヒ・テーゼ」を捉え直した場合、マルクス主義と晩年のコルシュとの関係についてどのような像が浮び上がってくるのだろうか。30有余年にわたる理論と実践の両面でのマルクス主義とのかかわりのなかで、繰り返し体験せざるをえなかった挫折とからみあって生じたと思われる、マルクス主義にたいする牽引と反撥という相互に矛盾するアンビヴァレントな感情に身を引き裂かれながら、にもかかわらず、ついにマルクス主義の魔力から脱しえなかった晩年のコルシュ像がこれであって、晩年のコルシュにおけるマルクス主義との関係をめぐる、あい対立する2つの解釈も、マルクス主義にたいする晩年のコルシュのこのアンビヴァレントな関係を一面的に切断して強調したところにうまれたものというべきであろう<sup>17)</sup>。だが、この点を説得的に説明しうするためには、すでに指摘した方向にそった「チューリヒ・テーゼ」そのものの詳細な分析がなによりも不可欠であるが、もはや紙幅の余裕もつきたので、この点については、いずれ稿をあらためて論ずることにしたい。

15) ランゲルハンスについては本節174ページ、マティックについては本稿第2節158ページの叙述を参照。

16) 以上の視点からこれらの命題の一つ一つを理解する上で、ケルナーの論文は非常に示唆にとむ構成と内容になっている。

17) ただし、ランゲルハンスは晩年のコルシュにおけるマルクス主義否認説の立場からではあるが、「マルクスにたいするコルシュの態度の2面性 (Ambivalenz)」を指摘している (M. Buckmiller/J. Kammler, *op. cit.*, S. 286)。